

連載コラム

みずき野と
その周辺の
植物と昆虫

第10回

ウメとサクラ



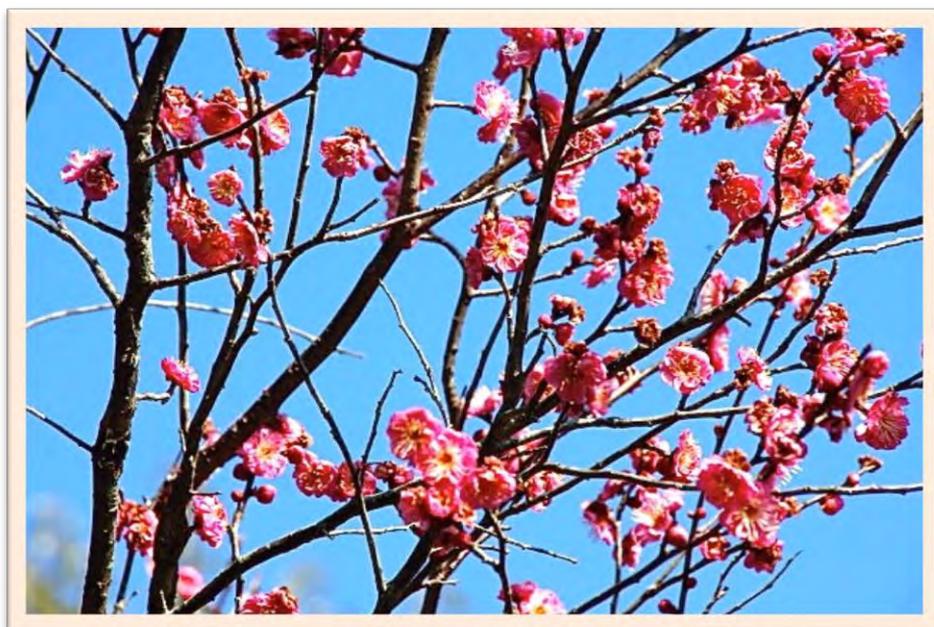
本吉總男

みずき野とその周辺の植物と昆虫

(10) ウメとサクラ

みずき野では、さくらの杜公園などで、いろいろなウメやサクラを身近に見ることができます。また周辺の里山には、しばしばヤマザクラなどの大木が花を咲かせます。本文の執筆時はまだ大寒の最中ですが、季節を先取りして、ウメとサクラについて書いてみることにしました。

(1) 春はウメとともに



先日、1月中旬、さくらの杜公園を散歩したとき、ウメのつぼみがそろそろふくらみはじめているのを見ました。やがて節分を過ぎると、まだ寒いながらも「光の春」と言われる季節がやってきます。ウメの花が一輪、二輪と開く日ももう間近でしょう。そして2月中旬近くになると、早咲きのウメはすでに花を開き初めます。また、ウメの季節は比較的長く、3月初旬までは充分梅見を楽しめます。

ウメ 2月上旬
さくらの杜公園



ウメ 3月上旬
貝塚地区

ウメは日本人の好む花ですので、在来種のように思われがちですが、ウメの原産地は中国の四川省と湖北省の高地とされ、日本へはもともと中国から入ってきたものだそうです（牧野富太郎植物記5 あかね書房）。ウメの花はすでに万葉集の中の約120首の歌に詠み込まれています。ただし、ウメの歌は万葉の時代の後期の大伴旅人や山部赤人などの歌人の歌には見られるが、それ以前の歌人、柿本人麻呂など持統天皇や文武天皇の時代にはまだ梅の歌は詠まれていないそうです。そして万葉集の歌に現れるウメはすべて白梅と考えられているようです。以上は「万葉植物事典」（北隆館）からの引用ですが、その著者はウメの渡来は天武天皇時代の686年頃と推定しています。平安時代になっても、紅梅を詠んだ歌は古今和歌集（900年代初期）には現れず、後撰和歌集（951年）以降、初めて現れるとのこと。

ところで、ウメといえば、菅原道真が太宰府に左遷されるときに詠んだ

こち吹かば 匂いおこせよ 梅の花 あるじなしとて
春を忘るな 菅原道真（拾遺和歌集）

を思い起こさずにはられません。道真は牛と関係が深く、道真（天神様）を祀る天満宮にはよく神牛の像が置かれています。京都の北野天満宮のホームページによれば、道真は承和12年（西暦845年）6月25日の生れとされ、この年は丑歳で、道真には牛にまつわる伝説や縁起が多く伝えられ、牛は天神様のお使いとされているとあります。

此（この）梅に 牛も初音と 啼きつべし
芭蕉（当時の俳号は桃青）（江戸両吟集）

ウメが表現する季節感は、和歌より俳句によく現されているように思います。



梅（むめ）一輪 一輪ほどの 暖かさ 嵐雪（遠のく）
 むめが香に 追いもどさるる 寒さかな 芭蕉（荒小田）
 しら梅に 明（あく）る夜ばかりと なりにけり 蕪村



蕪村の句は蕪村臨終の床にて作った句です。蕪村は天明3年（1783）12月25日が忌日ですから、新暦では1784年1月17日に当たります。白梅にはまだ早い季節ですが、やがて来る白梅に明るる夜を夢見つつ、作った句なのでしょう。

蕪村の句に因んで、わが家の白梅の写真を入れさせていただきます。



ウメ 2月中旬
わが家の庭

（2）春爛漫：サクラの季節

さくらの杜公園の西の入口には、この公園の説明板が立てられています。その中に、この公園には16種のサクラ（寒緋桜、染井吉野、大島桜、山桜、駿河台句、大山桜、紅八重枝垂、不二桜、鬱金、兼六園菊桜、一葉、楊貴妃、子福桜、十月桜、松月、手鞠）が植えられているとあります。

さくらの杜公園の説明板



ウメの季節が過ぎる頃、公園にはカンヒザクラ（寒緋桜）がその名のとおり、濃い緋色の花を咲かせ始めます。がく筒と花卉が下向きに咲くのがこの花の特徴です。沖縄県で栽培されているサクラはカンヒザクラで、当地では単にサクラで通っているようです。カンヒザクラの本来の野生地は沖縄ではなく、台湾や中国の南部地帯と推測されています（本田正次「植物学のおもしろさ」朝日選書366）。



カンヒザクラ
3月下旬
さくらの杜公園

そして3月下旬から4月上旬の頃、ソメイヨシノ（染井吉野）の季節を迎えます。



ソメイヨシノ 4月上旬 さくらの杜公園

上述の著書のなかで、本田正次は次のように述べています。

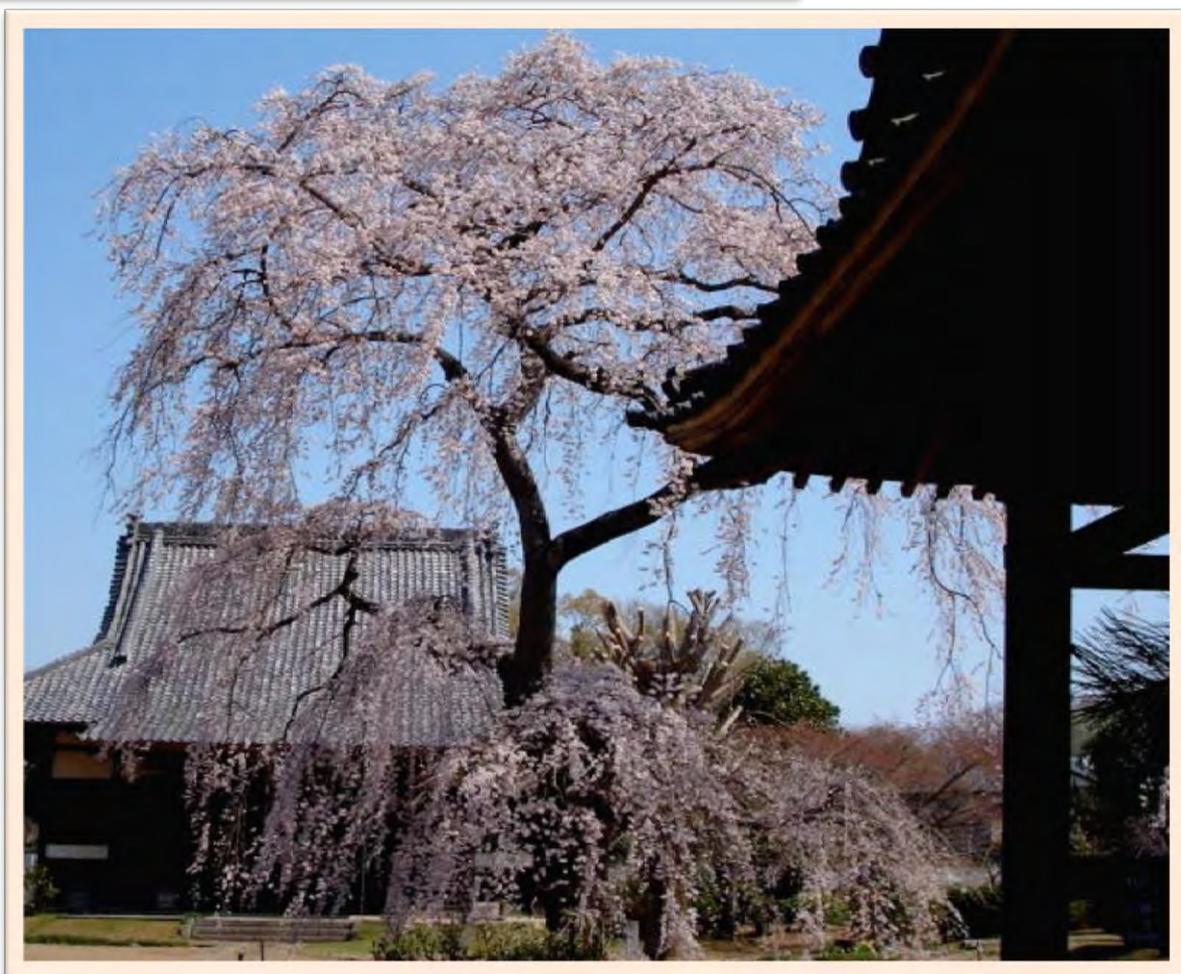
ソメイヨシノは江戸末期から明治にかけて、駒込の染井にあった植木屋からヨシノザクラとして売り出されたもので、その後、藤野寄命という本草学者がソメイヨシノと名を改めた。しかし、このサクラは染井が発祥地ではなく、伊豆半島でエドヒガンとオオシマザクラとの自然雑種として生じ、それが染井の植木屋に運ばれたものであろう（要約）。

今はほとんど全国、サクラはソメイヨシノの代名詞のようになっており、サクラの開花宣言や桜前線の移動もソメイヨシノの花によって決められています。花見の対象も、大抵はソメイヨシノです。さくらの杜公園も年々ソメイヨシノが生長し、花見の客も集まるようになりました。

さくらの杜公園には、非常に美しいベニヤエシダレが植えられており、ソメイヨシノより少し遅く花をさかせます。エドヒガンの園芸品種で、京都平安神宮のサクラとしても有名です。因に、一茶の「行くとしや空の名残りを守谷まで」の句碑がある守谷市の西林寺には立派なシダレザクラがありますが、花は一重です。



ベニヤエシダレ
4月中旬
さくらの杜公園



西林寺（本町）の
シダレザクラ
4月上旬

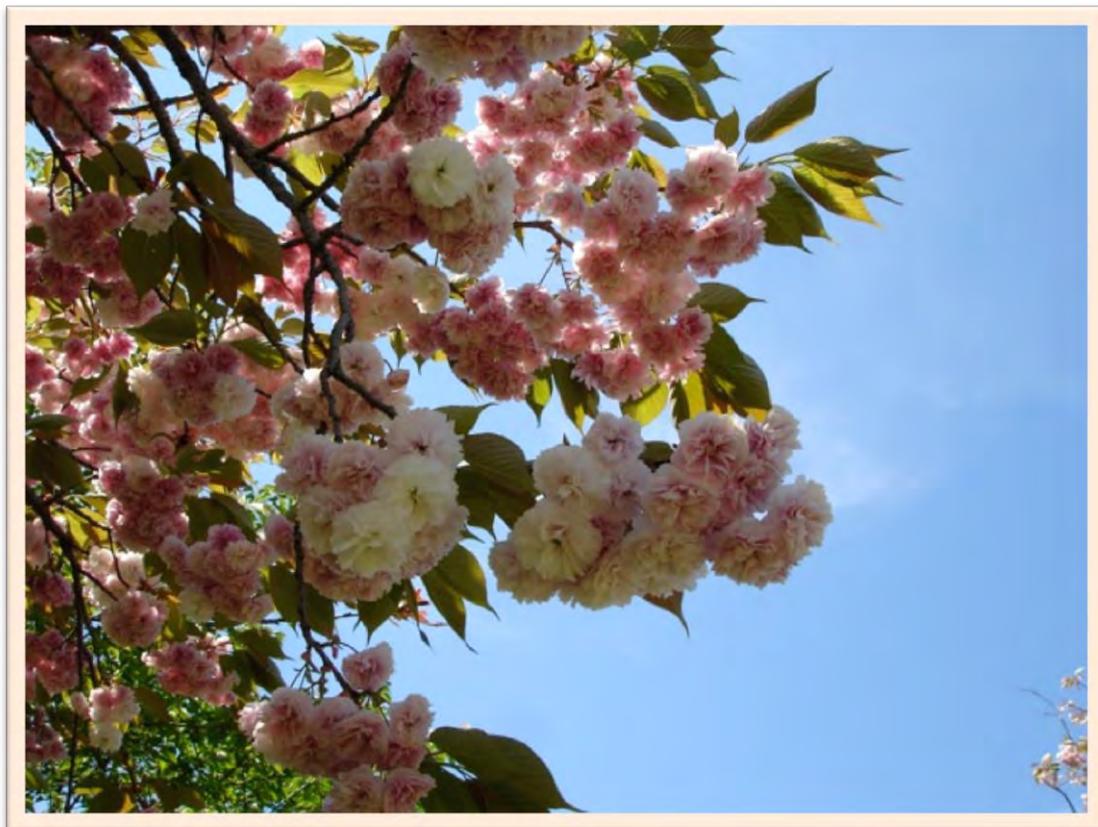
ヤマザクラ、オオシマザクラ、オオヤマザクラも4月中旬までにはこの公園に咲きますが、残念ながら公園での写真を撮っていません。代わりに本町地区の里山で見かけたヤマザクラと思われる写真を載せておきます。



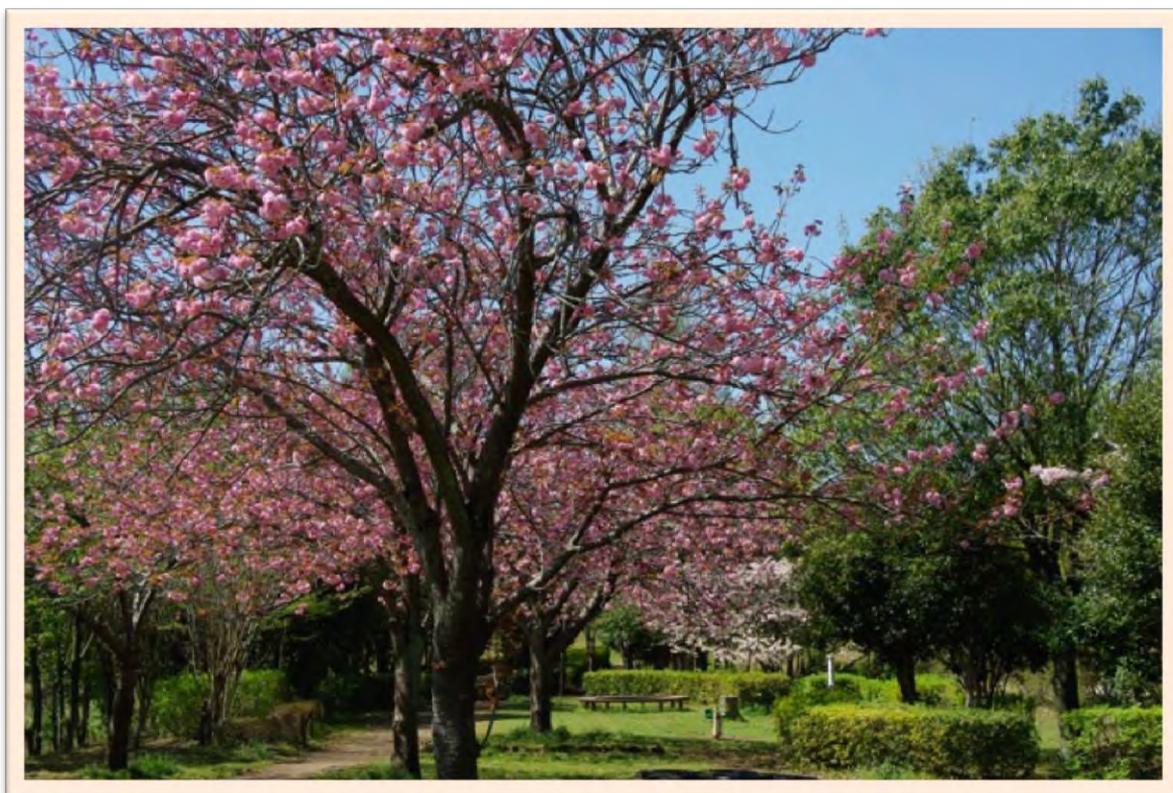
ヤマザクラ（推定）4月中旬 本町地区

4月下旬になると、幾重にも花びらをもつ八重桜が満開になります。フゲンゾウ（普賢象）、イチヨウ（一葉）、カンザン（関山）、ショウゲツ（松月）などです。ソメイヨシノ満開どきの、花見の賑わいはすでに終わり、公園はひっそりしていますが、落ち着いてこれらの花の美しさを鑑賞するのもよいものです。ありがたいことに、近頃はそれぞれの木に種名や品種名を示す名札が付けられているので、興味をもってそれぞれの花の特徴を調べることができます。





ショウゲツ(松月)
4月下旬
さくらの杜公園



カンザン(関山)
4月下旬
さくらの杜公園

話は変わりますが、前述したように、万葉集には約120種のウメの歌があり、サクラを詠んだ歌は46首で、サクラよりウメに人気があったようです。しかし、平安時代になると、人気は逆転して、サクラの方がもてはやされるようになります。そしてこの時代に起こったサクラブームは衰えることなく、現代までも続いています。

心にうかぶ著名な歌と俳句をいくつか並べておきます。

世の中に たえて桜の なかりせば
 春の心は のどけからまし
 在原業平（古今和歌集）

花見にと 群れつつ人の 来るのみぞ
 あたら桜の 科（とが）にはありける
 西行（山家集）

ねがはくは 花のしたにて 春死なん
 そのきさらぎの もちづきのころ
 西行（山家集）

花の雲 鐘は上野か 浅草か
 芭蕉ぞくみなしぐり（続虚栗）

奈良七重 七堂伽藍 八重ざくら
 芭蕉（泊船集）

咲く花や けふをかぎりの 江戸住居
 一茶（一茶旅日記）



もちろんこれらの歌や俳句に現れるサクラはソメイヨシノではありません。これらに詠まれたのはどんなサクラなのでしょう。サクラを詠んだ詩歌は古代から現代まで、無数にあります。好きな詩歌を見つけて、ヤマザクラ、エドヒガン、シダレザクラ、ヤエザクラ、それともソメイヨシノ、想像しつつ鑑賞するのも、サクラの季節の楽しみです。

(3) ウワミズザクラとイヌザクラ

ウワミズザクラもイヌザクラも、一見サクラの種類には見えない穂咲きのサクラです。地味なサクラなので、咲いていても気が付かないことが多いようです。両者とも在来種で、山野に自生しています。ウワミズザクラは栽培されているものも多いようですが、イヌザクラはみずき野周辺に見られるものは、ほとんど自生のようです。それだけに、イヌザクラには野生味が感じられません。



ウワミズザクラ 4月下旬 本町地区



イヌザクラ 5月上旬 上高井地区

ウワミズザクラとイヌザクラはよく似ていますが、ウワミズザクラの花穂の枝には花穂の下に葉が付き、イヌザクラの花穂の枝には葉が付かないので、両者は容易に区別できます。

ウワズミザクラの開花は4月下旬ですが、イヌザクラは少し遅れて5月上～中旬に咲きます。イヌザクラが咲くとやがて季節は初夏に変わります。

